

俵 賞



京都大学名誉教授，日本学士院会員

澤 村 宏 殿

鉄冶金学の学術的進歩ならびに鉄鋼業の
技術的向上発展

氏は大正9年7月京都帝国大学工学部採鋇冶金学科を卒業し、直ちに京都帝国大学工学部講師、同10年7月助教授、昭和8年3月教授に任ぜられ、冶金学第一講座を担任し、昭和33年京都大学を定年退官するまで鉄冶金学、鉄鋼材料学などの講義および研究を行ない、冶金学の発展に貢献するとともに高潔な教育者として後進の育成に務め多数の優れた人材を養成した。また昭和37年4月より8年間関西鉄鋼短期大学（現鉄鋼短期大学）学長として同大学の設立発展ならびに学生の育成指導に当った。京都大学在任中には評議員、工学部長を歴任して大学の運営発展に尽力し、学外にあっては日本学術会議会員、科学技術庁科学技術審議会専門委員を務め、さらに日本鉄鋼協会会長、鉄鋼技術共同研究会会長、日本金属学会副会長等各種学協会役員として鉄鋼および金属の学術・技術の発展に貢献した。一方氏は、日本学術振興会第19（製鋼）、24（铸件）、54（製鉄）、70（貧鉄鋇処理）委員会委員として多数の研究報告を提出して指導的役割を果たし、とくに昭和29年より16年間第19委員会委員長在任中には運営委員会を設け、当面する最重要研究課題を選定して、非金属介在物、製鋼反応およびオーステナイト結晶粒度の各協議会や微量元素懇談会等の分科組織を新設し、これらの産学協同による研究成果は戦後のわが国の鉄鋼技術水準の向上にきわめて大きく貢献し、第19委員会は飛躍的な発展をとげた。

氏の研究業績はきわめて多方面にわたるがその第一は

鋇鉄に関する研究であり、白鋇の黒鉛化に及ぼす種々の元素の影響に関する幾多の研究は当時未解決であった白鋇の黒鉛化機構に理論的解明を与えたものとして世界的に著名である。また白鋇等の黒鉛化時間短縮のための熱処理法、普通鋇を原料とする低りん鋇の製造法の開発、含チタン微細化共晶黒鉛鋇鉄、すなわちS-H鋇鉄や稀土類元素を添加した耐酸高珪素鋇鉄の発明などがある。

次に製鉄製鋼の分野における研究には、製鋇製鋼反応に関する熱力学的研究を主体として鉄鋇石の前処理、鋇鉄の脱硫等に関する研究、鉄鋼中のヒ素に関する一連の研究、鋼の材質に及ぼす微量元素の影響に関する研究等きわめて多岐にわたり、これらの研究成果をもとに執筆された氏の著書、「理論鉄冶金学」および「鉄鋼化学熱力学」はわが国における鉄鋼製錬関係の研究者、技術者および学生の指導書として高く評価されている。

さらに非鉄合金の流動性、土窯式海綿鉄製造法に関する研究、製鉄工業に関する経済地理学的研究などがあるが、氏の著書「世界各国の製鉄工業」はわが国における経済地理学的研究の先鞭をつけたものである。

氏はこれらの業績によって昭和53年日本学士院会員に推挙され、また日本鉄鋼協会依論文賞、同渡辺義介賞、同製鉄功労賞、本多記念賞、日本金属学会賞、日本鋇物学会名誉賞および同久保田鉄工賞、さらに日本学術振興会第19委員会から功労賞を授与されている。

俵 賞



川崎製鉄(株)相談役

藤本一郎殿

わが国鉄鋼業の進歩発達と海外協力

氏は、昭和7年3月東京帝国大学工学部冶金学科卒業後直ちに株式会社川崎造船所に入社、川崎重工業(株)製鉄工場薄板課長、圧延部長、川崎製鉄(株)葺合工場副工場長・工場長、技術部長を歴任、昭和37年専務取締役、39年副社長、41年7月社長、52年6月会長、56年6月相談役に就任し、現在に至っている。

この間、戦後わが国初の銑鋼一貫製鉄所、当時世界でも最新鋭の臨海製鉄所として、わが国鉄鋼業の飛躍的發展に先鞭をつけた千葉製鉄所の建設およびそれに続く世界最大級の水島製鉄所の建設に果たした氏の役割、功績はまことに顕著である。

氏は、多年にわたり同社技術部門の最高責任者さらには経営の最高責任者として、同社の千葉・水島両製鉄所の建設・拡充ならびに葺合、西宮、知多の既存各工場の合理化計画の推進に携わり、その時点における世界最新の設備・技術を積極的に導入すると共にこれらの工場の管理・運営を統活し、設備の合理化、技術の向上に力を注ぎ、良質低廉な製品の安定供給を可能として、わが国鉄鋼業並びに産業の発展に多大の貢献をした。

氏は、海外特に所謂発展途上国に対する経済協力の重要性を早くから認識し、海外合弁事業の設立・育成や発展途上諸国に対する技術援助を積極的に行なってきた。なかでもとりわけ大きなプロジェクトはフィリピンにおける焼結工場とブラジルにおけるツバロン製鉄所の建設である。氏は、同社社長あるいは会長として、これらのプロジェクトを熱心かつ強力で推進し、わが国鉄鋼業の発展に多大の貢献をなしたばかりでなく、これら諸国との友好関係促進に大きく寄与した。

氏は、社業に専心従事するほか、鉄鋼短期大学理事長(昭和43年5月～48年8月)、日本鉄鋼協会会長(昭和43年4月～45年4月)、原子力製鉄技術研究組合理事長(昭和48年5月～56年12月)、日本金属学会会長(昭和50年4月～51年4月)等数多くの社外団体の要職を歴任し、わが国産業、経済、教育の発展に多大の貢献をなした。

相談役に就任した現在も、社業の発展と後進の育成に大所高所より指針を与えている。